

パラグアイでの生活と工芸教室

堀之内 輝 男

パラグアイの第一印象

始めて経験する海外への旅、それも地球の裏側にある国、不安と夢を抱きながら、正直云って言葉も知らない無謀さを感じながらの旅であった。幸い諸先輩をたよりの安心感もあるとは云え、現地の実状に即した方法で自分なりの方法で技術を活かせるなどと、さまざまなことを考えながら、ロスアンゼルス・リマ・リオデジャネイロ・サンパウロ・フォスイグアスの順路で目的地へ、それぞれの国の一コマコマを確かめながらの約 32 時間の飛行機の旅、昔は船で 40 日かかったそうであるが、私にとっては今まで体験したことのない一番長い旅であった。

始めて見るパラグアイを、首都アスンシオン上空から見たとき、アンツーカーを敷きつめたような道路と畑、レンガ色の建物と緑のバランスの何と素晴らしかったこと、想像していた国のイメージとはまるで異なる美しい国だと思ったのが第一印象であった。この国なら何かやれるのでは、自分なりに何かを伝えることができるような気がした。1982 年 10 月 9 日のことである。

パラグアイは南半球のため日本とは気候が反対で、肌寒い東京から急に真夏に逆もどり、時間は丁度 12 時間遅れになる。日本が夕方のときパラグアイは同じ日の朝、時計はそのままでも良いが、朝目覚しを掛けておいたのが夕方鳴ることになると云ったところである。

アスンシオンの街は紫色の花を付けたジャカランダ並木がとても美麗だった。それにパラグアイの人は目鼻立ちが良く、特に目が美しく澄んでいて純朴な感じが印象的である。アスンシオンからエンカルナシオンまでは、国道一号線を南へ 360 km、約 6 時間のバスの旅、車窓から見る景色は日本で見たことのない広大な土地と見渡す限りの牧場など、気持ちも広く考え方も大きくふくらむ感じであった。エンカルナシオンの街はアルゼンチンのボサダスとパラナ川の対岸の街で、パラグアイでは三番目に大きな街でアスンシオンに比べ静かなたたずまいの商業都市である。ここから更に東に国道 6 号線を 64 km のところに、任地の林業開発センターがある。いよいよセンターに着き敷地の広さ(約 40 ha)とレンガ造りの建物が印象的で、想像していたより立派な施設でびっくりしたが、早速小さな虫の襲撃に会い手が腫れたのには参った。

HORINOUCHI, Teruo : Life in Paraguay and Woodcrafts
(社)日本林業技術協会

パラグアイには日本と異なる動植物や自然が有り、パラグアイ独特のデザイン要素が沢山有るなと感じたことだった。

テラロッサ

始めてアスンシオン上空から見た土、アンツーカー色で非常に美麗で感動した土、土壌学ではテラロッサ (terra rossa) と云い、大変肥沃で農業に適した土壤であることを始めて知った、無肥料で15年間大豆ができるとか、しかし一度雨が降ると下駄に雪が付くような状態で靴などべとべとになる。雨靴が一番良いが現地の人は素足が一番だと言う。どこの家庭にも玄関先には鉄板などで作った土落しの道具が置いてある。

畑仕事は雨になると全然できないし、車もずるずる滑る。初めての運転はできるものではない。ジープでもハンドル操作を少しでも誤ると横滑りになって始末が悪いものである。コロニアの人たちは慣れたもので良く運転しているが、いったんめり込んだらトラクターなどの世話になることになる。だから道路が傷むといって通行止めになることが多い。早く幹線道路だけでも心配なく走れる道をと皆が望んでいる。1983年の大雨の時期は、いたる所に大豆を満載したトラックが動けなくなっていたものであった。このようなときの車は泥だらけで白い車も赤茶色になってしまう。しかし天気が良くなると乾燥するのは早くコチコチに硬くなる。原住民はゴム銃、弓の弾を土で作って、実に上手に鳥を打ち落していたそうである。またこの土が衣類に付くと仲々落ちにくい。

このような性質から、テラロッサの土が木材着色剤になるのではないかと、実験したところ非常に結果が良好であった。パラグアイには木材着色剤が少なく、一般的な方法としてコールタールや油煙などで着色し、ワニスで仕上げる程度の塗装方法がとられていた。未利用材の利用を図る上で、着色によってかなり利用価値が向上できる材が有ると思われたので、カウンターパートと共に検討した結果、土と酢酸ビニール接着剤それに油煙を適度に調合することで、杓目がはっきりする材もあり色調も非常に良くなった。講習会でも発表し、センターではこの方法をよく使用するようになった。

ここの土はまた晴天が続くと大変な土埃になる。あるとき急に小雨に逢い、車のワイパーを動かしたところ、ガラスに傷が着く感じであった。早速顕微鏡で観察してみたところ、角のある粒子を大量に含んでいた。この土が目に入ると、異状にチクチク痛む感じがするのもこのためであろう。パラグアイでは車のオイル交換が日本に比べ非常に早い。オイルの質が悪いと聞いているが、どうもそればかりではないようである。車の修理専門家に聞いてみたところ、ピストンリングや回転部分の磨耗が日本よりかなり早いそうで、それは土埃りのせいもあるのではないかとの話であった。

それならいっそのことコンパウンドになるのでは、と実験してみた。バケツに土と水を入れ良くかき混ぜ、沈澱させメッシュの小さい部分だけを乾燥し、パラグアイ産のツング油 (tung oil, アブラゴリの種子から作る) で練り上げたものを、木材塗装

の塗面研磨や自動車の磨きに使用してみたところ大変良い結果であった。このような発想でカウンターパートと共に実験することは、そのものの実用化も大切であるが、基本的なものの考え方、創造性を養う訓練になるようで、工夫する姿勢がみられるようになったことが一番の成果であった。

バラグアイの木工芸

バラグアイも車社会がどんどん進行している。50年も前のクラシックカーから最新型の車まで車種もかなり多く走っている。車検制度がないためか、ガタピシの車でも走れる車であれば文句は云われぬ。夜は片目の車が確実に一割程度は走っているようだ。単車であろうと一応四輪車と思ったほうが夜は安全を守る上で大切なことである。

木工技術についても同じようなことが云える。高級家具については、アスンシオンにドイツ系とスイス系の会社があり、上質の家具を製造しているが、それ以外は一般的にみて日本の昭和20年～30年代を思わせる質より安価なものが喜ばれている状態である。生活全般を見ても人生50年、月給13,800円の頃を感じることが多くまた、貧富の差も大きい国であった。

技術的には、木材の乾燥については人工乾燥材を使用している企業は前記二企業以外はほとんどない状態で、そのような事情から、家具のデザインも木材が狂うことを前提としたものが多く、開戸、引出しも縁をかぶせる構造で、隙間をかくす構造のものが多い。

建築についても新築の屋根は雨もりするのがあたりまえと云った感覚である。雨が降ってみて雨もり箇所を直すのが一般的な方法である。日本だったら新築の家で雨もりがあろうものなら大変なことである。規格によって品質管理された製品を当然のこととして使用している我々にとって、このような所で生活してみると、その有難さを改めて感じたことだった。このようなことは建具についても云える。雨が降ると動かないのが新築当時は多く、その都度調整すると云った具合である。

バラグアイではよく、ベランダや木陰で、家族や友人たちと、夏はテレレ、冬はマテ茶を飲みながら会話を楽しむのが習慣になっているが、そのようなときに使用するテーブルセットに安いものがある。国道二号線沿いの、カグアス地方で生産される家具で、テーブルに椅子4脚で日本円にして1,000円程度、ほとんど釘づけ構造で塗装はしてない。買った人が好みで塗装すると云うもので材料はガダンブーが多い。なぜこんなに安いのか、材料代だけで工賃はでない感じであるが、輸出用材などを取った残材・端材を非常に安く購入できそうである。この家具が全国的に売れているそうであるが、国道沿いに露天でずらりと売っているのも珍らしい風景で、ノンビリしたものである。

このようにノンビリと生活を楽しんでいると云った国民性、一気にすべてが改善されるのは仲々むずかしいことであるが、林業開発センターで基本技術を修得した人が年々多くなることで、時間はかかると思われるものの、一步一步発展の方向に進んで

いることは間違いない。

邦人移住地での木工芸教室

1983年2月、長期派遣になったのを機会に、先ずピラボコロニアに始めて入植された一世の方々に入植当時のコロニアの様子、開拓の苦労話、パラグアイ人の生活や性格などを良く理解するために多くの人の話を聞いて回った。と云うのも派遣前研修で技術移転も大切なことであるが、なんと云っても先ず友好が第一であると熱弁された講師の話が、頭にしみていたことや、知らぬ土地に来て先ずその土地のことを知る必要を感じたからである。

その頃は早ばつがあつたあとで、農家は不景氣風が吹いていた。そのようなことが大きく影響したと思われたが、林業開発センターのことをひがみの目で見、良く云う人は少なかった。先輩専門家をはじめ関係者の努力も自然条件が悪く不景氣になると人の心まで変るものかと思つたことだった。

その頃ピラボ自治会長の下副田氏も景氣回復のため東奔西走しなんとか状態を良くしたいと云う努力の最中であつた。良策はないかとのことで、私は木工の専門であり木工芸教室でも開いて一人でも多くの人々と話し合うことで、何かできるかも知れないと云つた話から、是非やってみてくれと云うことになった。当時の佐藤リーダーの協力もあつて、とにかく自治会で希望者を募集してみたらと云うことになった。結果は思ったより希望者も多く、5月から実施と云うことで準備にかかったが、悪いことは続くもので、4月から7月にかけて観測史上最高記録、70幾年振りの大雨となり、大豆の収穫期に収穫もできず、畑で黒く腐ったりで慰めめる言葉もなかった。道路、橋の被害も大きく工芸教室どころではなかった。パラグアイ国としても各地で大被害が続出、ピラールの街はほとんど水没し世界に報道されたとのことであつた。

その頃ピラボ婦人部から機関紙「あゆみ」24号への寄稿依頼があり、「暮らしに生かす木工芸」と云う題で投稿した。長雨の被害に対する力づけと、せっかく企画した工芸教室、開講の機運になればとの願いを込めてのことであつた。

このようなことがあつて、工芸教室が始まつたのがその年の9月のこと、一ヶ月に2回隔週午後、参加者の都合の良い日を選んで実施することになった。始めのうちは男性の参加者もあつたが、農繁期に入るとご婦人が主体になり、作品内容も婦人に合った小物で家庭的なものが主体になった。

初回は道具を持たない人も多く、サンドペーパーだけで作るキーホルダーと云うテーマ、材料は林業開発センターで準備した木片で、デザインは自由であるが始めてのこと、一応サンプルとして二、三種類作り参考にしてもらつたが、思いの外皆良いものが出来た。ご婦人が主体のため興味あるものの方が良いだろうと云うことで、装身具（ブローチ・ペンダント・指輪）をミシン鋸、小刀、ヤスリ、サンドペーパー等で作るのであるが、常に15人前後の参加者があり小刀も数が足りないため、小刀製作もした。パラグアイには切出し小刀は販売していないため、何処の家庭にも有る平ヤスリを利用することにした。

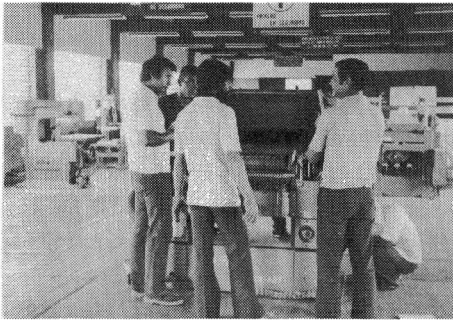


写真-1 林業開発センター（CEDEFO）の木工場

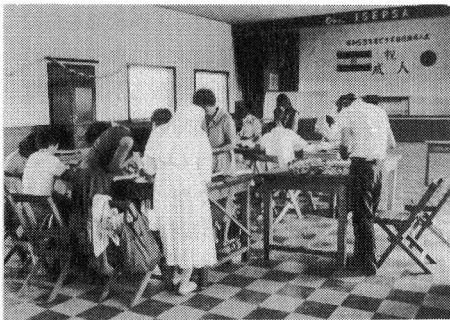


写真-2 ピラポコロニアでの工芸教室



写真-3 ピラポコロニア 25 周年記念事業のひとつ、初めての工芸展（1985 年 11 月）

パラグアイでは草木を切ったり農作業にも良く使用する、マチェテ（刃渡り約 40 cm～50 cm）が有り、それを研ぐのに平ヤスリを使用しているので、ヤスリの使い古しは沢山有る。これをハンドグラインダーによって、長さの真中を斜めに切断するとヤスリ一本で二本の切出し小刀ができる。ヤスリ目を取り小刀の形に整形したあと、焼き入れを行い柄を付けると立派に切出し小刀になる。小刀以外に平ノミ、丸ノミ等木工芸に必要な工具を作ることができた。それに皆の要望で日本から道具の協力もあり、作品もお盆、盛器などと大きくなり、デザイン、仕上技術もかなり上達したので、二年目からは、林業開発センターのカウンターパートも加工技術指導に参加してもらうことにした。このことは林業開発センターの協力期間が終了した後も、センターとコロニアの人たちが気軽に相談しながら、お付き合いが出来るように願ってのことで、また作品の内容によっては、半加工をセンターでやってもらい、材料代、加工賃を自己負担してもらうことにより、両者がかなり良いかたちで運営できるようになった。

ピラポ工芸教室の外にフラム農協の婦人学級での講演会「子供の教育に活かす木工芸」「暮らしに活かす木工芸」など、それから 1985 年度からチャベス婦人会からも工芸教室の要望が有り月一回終日実施、ここでも工具作りから

始めたが、ピラポの経験を活かし、林業開発センターのカウンターパートにも技術指導を一緒にやってもらった。ここでは御主人も熱心な方が多く、木工だけの話ばかりでなく造林、農業の今後の有り方とか、畜産の話など聞かしてもらったが、もっと柔かく美味な肉牛育てに、林業との組合せを要望しておいた。

また、農閑期を利用して、男性を対象にした木工研究会を開き、グループ別に分けてみたいものを

対象にした。太鼓保存会による一木造りの大太鼓（直径 90 cm 長さ 1 m）、農和会による、お神輿、木臼、公民館用の長テーブルなどを製作した。この計画には林業開発センターの所長はじめカウンターパートたちの協力もあり、時には休日を返上したりの熱心さ、夜は親睦会を開いたりして、技術研修と同時に、日パの深い絆ができた。このようなことがあってから、日系の人々も気軽にセンターに立寄ってくれるようになったし、造林の相談も多くなったりで、明るい雰囲気の仕事作り研究会であった。

最近届いた農和会員からの便りによれば、6月にエンカルナシオンで行なわれた、パラグアイの祭りにお神輿と太鼓も参加して、大変賑わったそうで、ハッピー姿の写真も同封されていて懐かしく拝見させてもらった。

おわりに

地平線まで続く真直ぐな道、綿をちぎったような雲の多い空、夕日がとても素晴らしかったパラグアイ、今年は日系人入植 50 年祭、各地で色々な行事が進行中の事だろう。

日本みたいに物は豊富ではないけれど、明るく楽しく生きているパラグアイの人たち。自然の厳しさにも耐え、黙々と農業に、子弟の教育に、そして地域の発展に努力している日系移住者、真の国際協力者たちに、そしてパラグアイの人たちに、農林業開発プロジェクトの成果が反映し、より住み良い素晴らしいパラグアイの発展を、心から祈ってやまない。

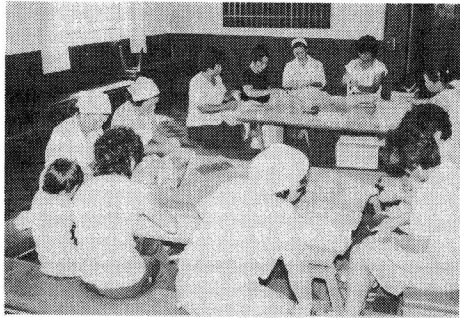


写真-4 好評に応じてチャベスコロニアでも
工芸教室を開設—カウンターパート
も指導に参加